

令和4年度 データサイエンス・AI教育プログラム 自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

データサイエンス・AI教育プログラム自己点検・評価実施委員会

(責任者名) 吉田 尚史

(役職名) 副学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>教務部において、教育プログラムへ履修登録している学生数や履修状況の分析・把握が可能となっており、令和4年度では以下の結果が報告された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム履修登録者 178名 ・プログラム修了者 94名 ・未修得者 84名 <p>プログラム修了に必須である「データサイエンス・AI入門」については、前期・夏季集中授業の履修登録者のうち約79%が単位取得している。今後、オンデマンド授業等を利用し、「データサイエンス・AI入門」およびオプション科目の履修可能な人数を増やすことにより、教育プログラムを履修希望する学生全員がよりスムーズに単位修得できるように改善を継続的に進めていく。</p>
学修成果	<p>必須科目「データサイエンス・AI入門」において受講前アンケート・小テスト等を行い、全履修者の学修成果を把握している。その他の科目についても成績分布等を分析することにより、学修成果を把握できるようになっている。例えば、受講前アンケートにおいて「データサイエンス・AI関連の授業を受けたことがない人」が70%程度、データサイエンスという言葉の意味を知らないという学生が55%程度いたが、最終課題において80%程度の学生がデータサイエンスの意義について自分なりの考えを表明できるようになっていた。このような分析結果をデータサイエンス・AI教育プログラム運営委員会で共有し、プログラムの評価を毎年度行い内容の改善を図る。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>本学では半期の授業ごとに「学生による授業アンケート」を実施し、学生の理解度を確認できる仕組みがすでに整っている。さらに申請プログラムの必須科目「データサイエンス・AI入門」においては、授業時間内に理解度を確認する小テストや実習の進み具合を確認する提出物を毎回課しており、これらの結果や提出状況からも内容の理解度や進捗度が把握できるようにしている。令和4年度のアンケート分析結果から、「データサイエンス・AI入門」について「よく理解できているか」という設問に対し85%程度が肯定的な回答をしている。今後も同アンケートを利用して継続的に理解度を把握し、プログラム運営に反映するようにしていく。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>他の学生への推奨度は、プログラム修了に必須である「データサイエンス・AI入門」において受講後にアンケートをとることで把握する体制となっている。令和4年度前期の授業が終わった段階で、「この授業を後輩や友人に勧めたいと思うか」という問いに95%以上の学生が肯定的な回答をしている。今後も継続的に受講生に対するアンケートを続け、多くの学生に推奨されるように内容を点検・改善していく。</p>

<p>全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<p>令和4年度は、本申請の教育プログラムの初年度であり履修登録者数が178名であった。現在では、まだ受講希望者全員を受け入れられておらず、令和5年度は、必須科目の「データサイエンス・AI入門」の履修可能人数を増やし履修者数および履修率の向上を目指す。令和6年度からは、教育プログラムの複数科目をオンデマンド化し、受講選択時の時間と場所の制約を緩和することにより、さらに履修者数を向上させる計画となっている。</p>
<p>学外からの視点</p>	
<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>本学ではデータサイエンス・AI教育プログラムは令和4年度開始であり、修了者の進路、活躍状況等の分析ができるデータはまだ出ていない。今後は大学で行っている卒業生向けのアンケートやキャリアセンターにおいて把握している進路等をプログラム修了者と結びつけて解析を行い、データサイエンス・AI教育プログラム運営委員会において、その結果を検討し、教育プログラムの改善に役立てる予定としている。</p>
<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・駒澤大学では、多様な価値観や知に触れる教育を大切にしており、この理念を活かすために、様々な学部・学科の専門教育までつながるプログラムを設置したことは評価できる。 ・身に付けるべき能力として挙げられている2点については、今後のデジタル社会を生き抜く力として必要であり、共通の入門科目の他、学部の特性に応じてオプション科目や応用基礎レベルのプログラムまで用意しており、体系的な教育プログラムと評価できる。 ・「データサイエンス・AI入門」では基礎的な知識や社会での利活用の実態について学び、後半ではエクセルによるデータ分析の基礎を実習形式で身に付けることができるように計画されている。
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>必須科目の「データサイエンス・AI入門」の講義の中では、その時SNS等で話題となっているAI・データサイエンス関連の話題を織り交ぜ、実際の社会の中におけるAIやデータサイエンスのおかれた状況がわかるようにしている。また、企業や政治等にデータサイエンスを活用している外部講師の講演を聞かせるなどし、座学中心の講義時にも学生の興味が持続するように工夫している。また、必須科目では実際に手を動かし能動的にデータ分析を行うことにより、学ぶ楽しさや意義を理解させるように努めている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>必須科目の「データサイエンス・AI入門」では毎回の講義において、実習の手順がわかる資料や動画教材等を用意し、LMSにこれらの物をアップロードしていつでも見ることができるようにし、予習・復習の支援を行っている。また、穴埋め式のノート資料を用意することで授業を聞いてノートをとりやすいようにしている。欠席をした時などでも、LMS上の教材を見ることが授業のフォローアップができ、これらの対応を通してより「分かりやすい」授業とするような運営を行っている。</p>